

輪舞

林京子

輪舞

林京子

新潮社

輪^{りん}
舞^ぶ

一九八九年 二月一五日 印刷
一九八九年 二月二〇日 発行

著 者 林^{はやし} 京^{きょう} 子^こ

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一番地
郵便番号 一六二 振替東京四一八〇八
電話(編集部) 〇三―二六六―五四二―
(業務部) 〇三―二六六―五一二―

印刷 東洋印刷株式会社
製本 加藤製本株式会社

定価 一二〇〇円

© Kyoko Hayashi 1989, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-355102-X C0093

輪
舞

目 次

さいた さいた	5
周期	87
眠る人びと	109
ティキ・ルーム	161
ナンシーの居間	205

さ
い
た
さ
い
た

二八一街十二号

路地の出入口は、油屋と鶏屋にはさまれていた。油屋の金文字看板の前を通ると、胡麻油と落花生油の匂いがした。匂いには層があつた。風の具合で、小学生のわたしの鼻先より落花生の流れが高くなる日と、消火栓の赤い頭より沈む日があつた。

油屋の主人は月に二回、新しい油甕の口をあけた。その日は路地の、立小便の白い跡がついた煉瓦塀に沿つて、稔りの麦畑のようにさざめく、匂いの流れがあつた。

鶏屋は新正月と、爆竹が鳴る旧正月の一週間を除いたほとんど毎日、鶏の首にナイフで切れ目を入れて、殺していた。路地の出入口と通りに、切り口から血を抜き取られた鶏たちが、羽をむしられる順番を飛び跳ねながら、待っていた。血が飛んで、マホガニー色の血痕に綿毛がこびりつき、曇った日は、生臭い臭いが路地にたつた。両足首を藁で括られて、地面を蹴って跳ねる鶏の指を、わたしは自分の節太い指に似ていると思つた。

わたしの家は、上海の二八一街十二号、羽毛の舞う路地の奥にあつた。

感 触

路地を入つて一軒、通りに一軒、ヤーチイの家があつた。通りにある娼婦の家は、四段石段をのぼつて、ガラス戸になつていた。上半分は色ガラスの、観音開きの戸で、紫と橙色と翠色のガラスで花と葉っぱと洋梨の絵が描いてあつた。紫色の洋梨がなる片側の戸は、雨の日でも開けてあつた。雨の日は戸の内に、体を斜によじつて立つて、ヤーチイの家の女主人は通りを眺めていた。

通りを、クーリーや、空車をひいたワンポーツオ引きが通つた。秘色の細身の煙草を喫いながら、女主人は、ゆっくり顔を通りの男たちに向ける。そして目で、男たちをガラスの内に誘う。路地の内の女主人はやせて、油紙色の顔をした女だつた。黒いシナ服を着て、竹で編んだ椅子を裏口に出して、股を開いて坐つていた。表のガラス戸には、花模様の壁紙が、隙間なく貼つてあつた。壁紙を貼つた表戸は、昼も夜も閉つていた。

ときどき、女主人は椅子を立つた。丸い竹の背もたれをもつて、四本の椅子の脚を激しく路地に打ちつける。小豆色の、てんとう虫に似た大小の虫が、竹の隙間からぼろぼろ落ちる。椅子から落ちると瞬間、虫は身を縮め、やがて素早く地面をはい出す。走る虫たちを、女主人の布靴が踏みつける。みているわたしも手伝つて、運動靴の先をたてて虫を擦り潰す。赤黒い、ときに鮮血の短い筋が、足許のコンクリートの面に、幾本も出来た。

小豆色の南京虫殺しは、ゴム底で虫をコンクリートに擦りつけるときの、生き物が弾ける快感があった。コンクリートに擦り込まれて消えていく血の筋の長さの分だけ、快感が後をひいて残った。

裏口から、ヤーチイの家のなかのぞけた。廊下の先に、客を待つ部屋があった。四、五人の娼婦たちが壁に背中をつけて坐って、いつも何かを食べている。唇を唾液で光らせて、娼婦たちは食べた物の殻を飛ばす。壁紙を貼ったガラス戸から射す薄い光が、娼婦たちの唇を浮きあがらせる。女たちは、シーコツを食べていた。

女主人も椅子に坐って、シーコツの紙袋をもつて食べていた。わたしにも、小指の爪ほどの黒い西瓜の種を右手一杯つかんで、女主人がくれる。

路地の奥で、母がわたしを呼んでいた。わたしは娼婦たちのように、シーコツの殻を吹き散らしながら、硬い殻が唇の間から飛び出ていく感触を、楽しんでいた。

情

ヤーチイの家の、表のガラス戸に貼ってある壁紙の角が、はがれていた。三角に隅がはがれて、そこに目を当てると室内がみえた。戸のノブに手をかけて、わたしは爪先立って部屋をのぞいた。裾の長いシナ服を着た女たちが、藁に青や赤の糸を織り込んだ団扇で、顔をあおいでいる。

路地には西陽が射し、ノブは水滴をつけている。上海の夏は黄浦江の水がどんどん蒸発して、

地上に水蒸気の河を作る。

いきなりわたしは頭をこづかれて、ガラス戸から剥ぎ取られた。小脇にかかえられて、尻を続けざまに二つ、叩かれた。父は、まだ会社にいるはずである。わたしは手足をふって、相手の顔をみた。路地の、大家の息子だった。横に青年が一人立っている。青年は、通りでみかけるクーリーである。しかしいつもと違って、大家の息子のように藍色の、足首まで裾がある学生服を着ていた。

大家の息子が、ブクイ、駄目、といった。横の青年が、チツチと舌先を鳴らして笑いかける。二人の青年の日焼けした顔を見上げながら、わたしは母の口癖を思い出した。おうちの手伝いがしたくないのなら、そんな子はヤーチイになるといいのよ、叱るとき母は、そういった。母や、花嫁になる女たちがヤーチイの仕事をしないのなら、ヤーチイになってもいい、とわたしは思った。

花柄の壁紙の内で、品定めに戯れている男とヤーチイたちは、楽しそうだった。待合室の隅においてある、下着をつけた女が坐っている一台の寝台は、桃色と水色の、ボイルの花飾りで飾ってあった。

ヤーチイが男たちと寝る女であることを、そのころわたしは、知っていた。

それでね、Y君の家庭がいいだろうという話になってね、と父が母にいった。夕食後の食卓の前に坐つて、父は爪楊枝をつかつている。

あすの昼過ぎに、重役二人を部長と僕が案内してくるからね、と父がいった。承知なされたのですか、と母がいった。

命令だから仕方ないじゃあないか、と父がいった。

東京の本社から、父が勤務する会社の重役たちがくる。目的は、上海支店に勤務する社員たちの、現地の生活を視察するためである。

父が、奥歯をほじくりはじめた。わたしは食べかけのおかずの皿を、そつと引き寄せた。父がわたしをみた。父は虫歯が沢山ある。前歯も奥歯も、金冠がかぶせてある。奥に一本、金冠がはがれた虫歯があるらしかった。その歯に、食べかすが詰まるらしい。前歯の間にはさまった食べ物のかすは、父は口許に手を当てて取る。しかし奥に詰まったご飯粒やおかずの食べかすは、口を開けて懸命にほじくる。礼儀にうるさい父が、このときだけは爪楊枝を立てて、カツカツ音をたてて歯の壁をほじくる。父の隣りに坐っているわたしはそのたびに、食べかすが飛んできはないか、気になった。

わたしは皿におおいかぶさつて、残った魚のフライを口に入れた。

穢いのかね、と父が訊ねた。わたしは、ちがう、といった。穢いと思うのなら、ちいさんは向こうにいつて一人で食事しなさい、と父がいった。おごちそうさま、でしよう、と母がわたしにいった。

お昼過ぎですと子供たちがいますよ、あしたは土曜日ですから、と母が話を交えた。Y君の娘

さんたちは成績優秀だから、と成績表を重役にみせるように部長がいつている、と父がいった。成績がいいのは、二人の姉である。姉たちの通信簿には、甲ばかり並んでいる。小学生になりたてのわたしは、甲が二つ三つ、乙が二つ三つある。妹は四歳で、まだ誰も点を打たない。

それに四人もの子持ちのうちだけでね、大所帯の家族が給料だけでどの程度の暮しをしているか、視てみたいらしい、と父がいった。普段着のままでよろしいんですね、子供たちもわたしもと母がいい、上海支店一の子沢山だっておっしゃるけれど、みなさん産児制限していらつしやるから、一人か二人なのよ、といった。父が、部長の家のように我儘息子一人きりじゃあ、どうにもならないからね、といった。

父と母の話を聞いていた姉たちは、わたしたちの成績が優秀だから東京の重役がくるんだって、と子供部屋ではしゃいだ。一人の姉が、ちいちゃん通信簿もみせるのかしら、といった。みせないでしょう、とあと一人の姉がいった。でも、みせたほうがいいと思う、さつきかあさん、わたしたちの通信簿揃えながらこれもご愛嬌って、あの子の通信簿出してたから、といった。

余計な手間がかかる、と母はいいながら、子供部屋の整理をはじめた。子供部屋には、押入れがなかった。子供部屋だけではなく、上海の家には、どの部屋にも押入れはなかった。子供部屋はもとは洋間で、十三畳の半端な枚数の畳が敷いてある。路地に向いた腰高な窓寄りの隅に、三角形の畳が一枚あった。三角形の畳は母の気に障るらしく、その上に客布団が積み重ねてある。壁と窓枠に支えられた布団には、日頃古いシーツが掛けてあった。余計な手間がかかると面倒臭がりながら、母は、古いシーツの代りに木綿の大風呂敷をかけているのである。母の里の女紋が入った、風呂敷である。簞笥掛けの風呂敷は丈が短く、布団が二、三枚はみ出している。

ありのままをみていただきましょう、と母は独り言をいって、風呂敷の端を、布団の間に押込んだ。そしてわたしたち姉妹に、お客さまなのだから、布団の上にのぼったりしては駄目よ、といった。

重ねた布団の高さは、床と天井までの空間の、三分の二を占めていた。わたしたち姉妹は窓枠を足がかりに、布団の山に乗り移って、よく遊んだ。窓枠を蹴って飛び移るとき、布団がぐらついて崩れることがある。傾いていく布団にしがみついて、布団と一緒に落ちていくのが楽しかった。

翌日の昼過ぎ、二人の重役は濃紺の三つ揃いの背広を着て、やってきた。一人は、口髭を生やした太った紳士である。笑顔を絶やさないう紳士で、姉たちの肩まである髪を撫でて、こんにちは、毎日誰と遊んでいるの、と聞いた。学校のお友だちと、と二人の姉が答える。遊びにいくの、あなたたちが、と訊ね、子供ばかり遊びに出して危険はないの、と父に聞いた。近所の中国人は心が知れていますし、陸戦隊の下士官集合所が近くにありまして、治安の心配はございません、それに日本人の子供には工部局のインド人の巡査が、特に目をかけてくれますし、虹口の表通りは安全でございます、と父がいった。

あなたもお友だちの家に遊びにいくの、と口髭の重役がわたしに聞いた。寒くなったのでいきません、お布団の上から飛び降りたりして遊びます、とわたしはいった。口髭の重役が、お布団と聞き、面白いの、と腰をこごめていった。

女の子ですのに、と母がいった。通信簿をご覧くださいますが、上海の小学生の勉強ぶりを、と部長がいった。父が、恐縮です、と重役たちに通信簿を渡す。お勉強出来るんだね、と重役たち

がいった。

「ご褒美をあげよう、と眼鏡をかけた重役が、白い細長い箱を、姉たちに一つずつ渡す。

あけてごらん、と口髭の重役がいった。姉たちが母の顔をみる。失礼して、あけさせて頂きたい、と母が許可する。シャープペンシルだよ、と眼鏡をかけた重役がいった。

黒い、エボナイトのシャープペンシルである。口髭の重役が一本取って、銀色の細工がしてある頭を廻した。先端から、鉛色の芯が出た。重役は続けて廻す。赤い芯が出る。紅色だろう、といった。次に青が出た。プルシャンブルーだ、と口髭の重役がいった。

三色ですか、おじさんも三色のシャープペンシルはもっていないよ、と部長がいった。

通信簿、みせてくれないの、と重役の手許をのぞいているわたしに、口髭の重役がいった。母が通信簿を渡す。おじさんの家の子供たちと同じだ、と口髭の重役がいった。わたしは笑った。いやあ見事な虫歯だね、と口髭の重役は、浸蝕された岩山のようになったわたしの乳歯をみて、腹をゆすって笑った。それから白い細長い箱を、眼鏡の重役から受け取って、わたしにくれた。重役たちと部長と父は、油屋の前に待たせていた車に乗って、会社へ戻っていった。母とわたし姉妹は、路地の出入口まで見送って出た。見送りながらわたしは、シャープペンシルの銀飾りの頭を、くるくる廻した。細いなめらかな赤い芯が伸び、青い芯に変わる。

ちいちゃんたら無邪気ぶって、いやらしい、と一人の姉がいった。

シャープペンシル、三色、べにいろ、産児制限、覚えたばかりの言葉を暗唱しながら、ごあいきょうよ、とわたしは姉たちにいった。